

1. 都市保全計画における集落の位置付け

「都市保全計画は都市の歴史性に立脚しつつ、都市・地区の歴史的環境の保全をおこない、同時にそれぞれの都市・地区が直面する現代的課題に対処していくことを通じて都市・地区の総合的な整備を意図した計画」で、その対象とする都市には「地方小都市や田園地帯の小集落等も含む」とし、「ひろく人の手になる環境一般、いわゆる built environment」で、「歴史的環境保全全般を含むひろい用語として都市保全および都市保全計画という語を用いる」

西村幸夫（2004）『都市保全計画』、pp.5-6

2. 山村集落を読み解く

- ・村落空間論：ムラ・ノラ・ヤマの3つの土地利用（福田アジオ(1980)「村落領域論」）
- ・基礎地域（水津一朗(1957)「村落制度」）

地形などの自然環境+近世の社会構造（秩序）を手掛かりに、具体的に集落を理解していく

富山県南砺市 五箇山地域 相倉・菅沼集落（世界遺産）

- ・江戸時代 加賀藩領（流刑地、塩硝）
- ・急峻な地形にある山村集落（水・気候条件により稲作難、桑畑にて養蚕業：合掌造り）
- ・五箇山 70 村（研究では 44 か村）
- ・浄土真宗（手次寺の違いから、家の出自が判明）
- ・社会組織と領域（大字）
- ・土地利用（生産空間）
- ・水利システム（組の根拠：最小単位）

3つの視点からの分析

①集落の秩序性（集落空間構造）

- ・村の基本構成
- ・集落空間構造（相倉）
- ・集落空間構造（菅沼）

②集落の単位性（地域から見る集落の機能）

- ・集落の立地特性（自然環境）
- ・集落単位根拠の分析・単独集落における単位根拠に関する考察
- ・空間類型

③集落の可変・不可変性（集落の変化への特性）

- ・明治期以降の五箇山（変化：①社会）
- ・明治期以降の五箇山（変化：②空間）
- ・ムラの発展と縮退
- ・ノラ・ヤマの利用と認識の変化

考察

- ・集落・集落保全の現代的解釈
- ・地域計画、文化的景観への応用

3. カトマンズ盆地の集落を読み解く（継続中）

ネパール・カトマンズ盆地コカナ集落（世界遺産暫定リスト）

- ・中世 ネワール伝統集落
 - ・インドーチベット交易路（カトマンズ盆地：地域における集落の位置づけ）
 - ・生業（土地利用・領域、水利システム）
 - ・ヒンズー教
 - 神様の場所、空間のもつ意味
 - 祭り：ルートや空間の使い方（空間には差がある）
 - ・社会組織
 - Tole, Twa（苗字血縁、地域最小単位か）→復興過程の変化（目に見えないメカニズム）
 - Guthi（伝統儀式や葬祭等の行事の互助組織）→3+1(寺の管理)、共有建物の存在
 - ・広場や中庭空間の呼び分けとその意味、通りの名前
 - 計画的に作られた広場・中庭か、場当たりの形成された空間か
 - 集落の中心はどこか
 - ・集落の変化
 - 土地利用・建物形状の変化（原因は何か）
 - ・ネワール様式の伝統民家と非伝統民家への変遷（現代的生活様式が表出・伝統との齟齬）
 - ・震災による被害状況の把握（どう保全し、どう復興するか）
 - ・町並み保全に向けた課題（生活様式の変化にどう対処するか）
- ネワール伝統集落の復興計画（都市保全計画の立案）

4. まとめとして

都市保全計画とは

- ・「都市の歴史性に立脚しつつ、都市・地区の歴史的環境の保全をおこない、同時にそれぞれの都市・地区が直面する現代的課題に対処していくことを通じて都市・地区の総合的な整備を意図した計画」
- ・「単体の歴史的建造物の保全施策と緊密な関係を持ちつつ、より広域を対象とし、より広範な領域に踏み込んだ都市計画的施策」

「都市はほとんどの場合、いくつもの時代の計画的意図を重層させながら形成されてきたものである。こうした計画的な諸動機を総体としてとらえ、都市をひとつの計画的行為の集積体としてとらえることによって、都市保全の対象ははるかに広がっていくだろう」

西村幸夫(2004)『都市保全計画』

質問等：都市デザイン研究室 森朋子 tm@ud.t.u-tokyo.ac.jp